

2021年8月8日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

申命記 18 : 15～22

ルカによる福音書 16 : 19～31

「金持ちとラザロ」

<神さまの御言葉>

今日のところは、イエスさまが語られた「金持ちとラザロ」のお話です。

ここでは、死後の世界が出て来ます。死んだ後にどうなるのか。どこへいくのか。わたしたちの中で、このことに関心のない人など、いないのではないのでしょうか。

しかし、イエスさまがここで教えようとしておられるのは、死後の世界に天国と地獄があって、そこへ行ったらどうなるか、というようなことではありません。

この物語は、前回のイエスさまのお話しに続いて語られていることを、忘れてはいけません。

前回は、金に執着するファリサイ派の人々に対して、イエスさまが語られた御言葉を聞きました。

イエスさまは、神さまが、わたしたちの心をご覧になる方であることを教えられました。

わたしたちが、どれだけ人の目に良く見えることを行ない、表面的に、形式的に神さまの御言葉に従っていても、神さまはお喜びにはなりません。

神さまの御言葉から、聖書から、神さまの思い、神さまの御心を聞き取って、心の底から従っていくことを、神さまは求めておられるし、喜ばれるのです。

そして、神さまの救いの御業を実現するために、救い主であるイエスさまが来られた今は、ユダヤ人だけでなく、世界中のすべての人に、救いの御言葉が告げられている。すべての人が、イエスさまによって、神さまの御許へ、神の国へ招かれている、と言います。

この救いへの招きの御言葉を聞いた者が、心から救いを受け入れ、招きにお応えすること。それが神さまの御心であり、イエスさまもまた、それを求めておられるのです。

今日のところでは、それを受けて、だからこそ今、神さまの御言葉を聞いた者は、それを受け入れ、信じなさい。今この時にこそ、神さまはあなたを悔い改めへ、救いへと招いておられるのだ、ということが教えられているのです。

わたしたちはそこに心を留めて、この金持ちとラザロの物語を聞いていきたいのです。

<金持ちとラザロ>

さて、ここに対照的な二人が出て来ます。この世にあって、王侯貴族のような生活をし、毎日が楽しみで満ち足りている「金持ち」と、金持ちの家の門の前に座って、おこぼれに与って何とか生きている「ラザロ」という貧しい人です。

まず金持ちは、自分の持ち物で満ち足りている様子が描かれています。つまり、日々の生活に不安も心配もありません。だから彼は、神さまに恵みを必死に乞い求める必要などありませんでした。

一方の「ラザロ」ですが、まずこの名前は、旧約聖書に出て来る「エリエゼル」という名前の省略形です。エリエゼルとは、神が助けてくれる人、あるいは、神の助け無くしては生きられない人、という意味です。まさに、貧しいラザロは、何も持っておらず、今日一日を神さまが養って下さるのでなければ、恵みを与えられるのでなければ、生きることが出来なかった。ただ、神さまの助けのみ、恵みのみによって、生きている人でした。

神さまの御前で、恵みを求めないで生きる人と、恵みを求めて生きる人。金持ちとラザロによって示されているのは、この対比なのです。

<人の行ないの結果ではない>

つまり、わたしたちは勘違いしやすいかも知れませんが、これは、ぜいたくばっかりで、良い行いをしなかった非情な人が、死後に苦しみに遭う。そして、貧しくつましやかに生きた人が、死後に天国のようなどころに行く、という話では一切ないのです。

むしろ、この金持ちは非情な人ではなくて、多少の憐れみをラザロに示していたのかも知れません。貧しいできものだらけのラザロが、自分の家の門前にいたのです。はっきり言って迷惑でしょう。だから本当に冷酷であれば、どこかへ追いやっていたのではないのでしょうか。でも書かれていることから、ラザロは毎日のように金持ちの門前にいたように思われます。なぜなら、ラザロが願うとおりに、食卓からのおこぼれをあげていたから、かも知れません。それに金持ちは、ラザロの名前も知っているようでした。

もしかしたらこの金持ちは、わたしたちよりも親切で、心が広いかも知れないのです。

それに、ラザロは、ただひたすら貧しかっただけで、良い行ないをしたとか、優しい人だったとか、そんなことも一切語られていないのです。

だからなおのこと、この物語は、「死後に苦しまないように、今できるだけ良いことをしましょう。お金がある人は施しをしましょう」ということを言いたいのではない、ということが分かるのです。ラザロは何もしていないし、金持ちは極悪非道な人ではなくて、おそらく人並みに親切だったのですから。

<宴席と陰府>

さて、この二人が死んで、ラザロは天使たちによって宴席にいるアブラハムのすぐそばに連れて行かれました。

「すぐそば」というのは、「懐」という言葉で、この場合には、食事をする時に、ある人の、その場で最も親しい身近な人が座る席のことを指すようです。

これは、天における神さまの喜びの宴、神さまと兄弟姉妹が共に親しい交わりに与るとこ

ろです。神さまに依り頼んで生き、神さまの恵みに生かされて生涯を終えたラザロは、自分を愛し、守り、養って下さった神さまの御許へ、懐の中へ、行ったのです。

一方で、金持ちも死んで、葬られました。地上では盛大な葬儀が行われたことでしょう。しかし、金持ちは陰府でさいなまれ、炎の中でもだえ苦しんでいたのです。

このもだえ苦しみは、神さまから離れていることの苦しみ。命の源である神さまから、最も遠いところにいる者の、滅びの苦しみを表しているのではないのでしょうか。

本当は金持ちだって、「ラザロ」、つまり、「神に依り頼んで生きる人」であるはずなのです。神に助けられなければ、生きられない人であるはずなのです。

金持ちが持っているものは、決して自分の力で得たものではありません。財産も、力も、才能も、人とのつながりも、すべては神さまが与えて下さったものです。そして、それらは神さまに喜ばれる目的のために、用いるものであるはずなのです。

彼もユダヤ人であり、おそらく安息日にはいつも会堂へ行って、神さまの御言葉を聞き、説き明かしを聞いていたでしょう。そして、そこでは、神さまがすべての造り主であり、支配者であること。すべてを恵みによって与え、救って下さるお方であること。だからこそ、神さまに喜ばれる生き方への導きが、語られていたはずなのです。

しかし、金持ちは、すべてが神さまからの恵みであることを忘れ、自分の今の楽しみのためにそれらを使い込んでいた。自分で自分を楽しませ、それで満ち足りていた。

そこに、神さまを思う心もなければ、恵みに感謝することもなかったのです。神さまに救いを求めることもなかったし、頼ることもなかったのです。

そうして自ら、神さまから遠く離れ去ったまま、彼は死んでしまったのです。

神さまに立ち帰る必要も感じていなかった。悔い改める必要が自分にあるとは思わなかった。ここに、金持ちの「罪」があるのです。

本当は金持ちも、15章で語られていたあの「放蕩息子」のように、我に返るべきでした。

放蕩息子も、父の財産を自分の楽しみに使い果たした挙句、すべてを失ってどん底に落ちました。その時に、この息子は「我に返った」のです。本来の自分の姿を知り、自分がいるべき場所がどこであるかに気付いたのです。父に養われていたこと。父に愛されていたこと。父の許にこそ、自分の生きられる場所があること。

しかし、金持ちは、我に返ること、立ち帰ることがなかったのです。そうして自分で神さまから離れ、本来の神さまとの関係を絶ったのです。

この、罪による神さまとの関係の断裂は、アブラハムが語るように「大きな淵」であり、アブラハムからも渡って行くことが出来ないし、金持ちの方から超えて来ることが出来ないほどに、深く深刻なものなのです。

<御言葉は与えられている>

…さて、この金持ちは、アブラハムに、ラザロを自分の五人の兄弟のところに遣わして欲しいと頼みます。兄弟たちが自分のように苦しまないために、言い聞かせてやって欲しいと言うのです。

しかしアブラハムは、その必要はないと言います。29 節「お前の兄弟たちにはモーセと預言者がいる。彼らに耳を傾けるがよい。」

「モーセと預言者」というのは、律法を中心とする旧約聖書のことです。それは、神さまがご自分の民に語られた御言葉です。

もうすでに、お前の兄弟たちには神の御言葉が与えられている。彼らにはすでに、神さまの御心も、ご計画も、救いの恵みも、それに応えなさいとの招きも、聞いているのだ。アブラハムは、そう言ったのです。

しかし、金持ちは食い下がります。「いいえ、父アブラハムよ、もし、死んだ者の中からだれかが兄弟のところに行ってやれば、悔い改めるでしょう。」

これに対して、アブラハムは言いました。「もし、モーセと預言者に耳を傾けないのなら、たとえ死者の中から生き返る者があっても、その言うことを聞き入れはしないだろう。」

金持ちは、兄弟たちも確かに、いつも安息日には礼拝をして、神さまの御言葉を聞き、説き明かしを聞いている。でも、それでは悔い改めません、と言ったのです。

彼には兄弟たちの心の内がよく分かるのでしょ。自分がそうであったように、ただ聞いているだけで、心から神さまを求めていない。神さまに依り頼む必要を感じてもない。

だから、死んだラザロが、彼らのところに出て行って、奇跡でも見せて、びっくりさせるくらいしなければ、彼らの心は動かさません、と言ったのです。

しかしアブラハムは、「モーセと預言者」つまり神さまの御言葉に、彼ら自身が耳を傾けないのなら。自ら神さまを求めて、心に向けて、真剣に聞こうとするのでなければ。たとえ奇跡に驚いたとしても、それで本当に心からの悔い改めをすることにはならないだろう、と言ったのです。

悔い改めとは、神さまに立ち帰ること。自分勝手な思いに従って、あらぬ方向を向いていた自分の心を、神さまの方に正しく向き直す、ということです。

それは、語られている神さまの御言葉によってこそ、起きることなのです。びっくりすることです。そうなるものではありません。

御言葉は、神さまが愛して下さっていること、恵みを与えて下さっていること、そして、神さまが、自ら背いて離れてしまったわたしたちの罪を赦して、忍耐強く、いつまでも帰ってくるのを待って下さっていることを告げています。

この神さまの御心を知るからこそ、わたしたちは、神さまに背き、悲しませ、怒らせるよ

うな歩みをしていた自分の罪に、気付くことが出来るのです。我に返って、神さまが待っていて下さることを知り、神さまに心に向けて、帰りたいと願うことが出来るのです。

だから、この神さまの御言葉に、真剣に耳を傾けること。告げられている神さまの愛を、救いの知らせを、今、しっかりと受け止めること。それが求められています。

そこにこそ、わたしたちの救いがあり、そこにこそ、神さまと共に生きる新しい命があるのです。神さまは、ずっとわたしたちに語りかけ、救いへと、御許へと、招いて下さっているのです。

<救い主>

しかし、御言葉を聞いても、疑い深く、自分の思いに忠実で、神さまを見つめることの出来ない、どうしようもないわたしたちの歩みです。

だから、そんな罪に捕らわれたわたしたちのために、神の御子であるイエスさまが遣わされ、迷い出て遠く離れたわたしたちを連れ戻すために、来て下さったのです。

そして、わたしたちの罪を赦すために、十字架に架かって死んで下さったのです。

それは、わたしたちが味わうべき、神さまとの断絶にある罪の苦しみを、炎の中のもだえ苦しみを、神の御子イエスさまが、ご自分の身に引き受けて下さったということです。

このイエスさまの十字架の苦しみと死に、神さまの罪の赦しが、救いへの招きが、はっきりと示されています。

そして神さまは、イエスさまを十字架の死から復活させて下さいました。この復活に、神さまと共に生きるわたしたちの新しい命が、復活の約束が、はっきりと示されています。

神さまの御言葉を、救いへの招きを、神の国の福音を、わたしたちはイエスさまの救いの御業を通して、今やこれ以上ないほどに、はっきりと告げ知らされているのです。

あなたに語られているこの御言葉を、しっかりと聞きなさい。そして、罪の赦しを受け取り、悔い改めて、神さまの御許に帰ってきなさい。死ぬ前に。終わりの日が来る前に。今、この招きに応えなさい。

イエスさまは、この物語を通して、そのことを教えて下さっているのです。

そうしてわたしたちが、神さまの御許に立ち帰るならば。救いの恵みを受け取るならば。わたしたちは、自分の命も、人生も、また生きるのに必要なすべてのものも、神さまが恵みによって与えて下さったものであることを知るようになります。

そして、この世のことを求めるのではなく、自分の欲望に忠実になるのではなく、神さまの御心にこそ忠実に、神さまにこそ喜んでいただく歩みを、求める者とされるのです。

なぜなら、わたしたちは終わりの日に、イエスさまが招いて下さる食卓で、イエスさまのすぐそばに、懐の中に、自分の席が用意されている。その本当の喜びと希望を、見つめることが出来るからです。

神さまに忠実に従う歩みは、世の人の目から見れば、損をするような、苦しみを自ら担うような、窮屈そうな、馬鹿げた歩みに思われるかも知れません。

でも、それは本当は、神さまに愛され、救われていることを知っているからこそ。生きている時も死ぬ時も、片時も離れずに、救い主であるイエスさまが共にいて下さることを知っているからこそ、出来る歩みなのです。救われた者は、恵みも、喜びも、助けも、慰めも、すべて神さまからいただくことが出来ると、知っているからです。

本当は、金持ちとラザロも、共にこの神さまの同じ恵みの中であって、共に生きていくことが出来たはずです。

そして今、わたしたちも、この神さまの恵みの中で生かされていることを信じるならば、共に同じ恵みの中にある兄弟姉妹と、与えられたものを分かち合って、支え合って、共に歩んでいくことが出来るのです。

この、神さまの御心が、神さまの御言葉が、今わたしたちに語られています。イエスさまの十字架と復活が、救いへの招きが、わたしたちに示されています。

わたしたちはこの御言葉に、今、真剣に耳を傾け、神さまの御許に帰りたいのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたが御言葉を、愛の御心を、救いの恵みを、わたしたちにいつも語りかけて下さっていることを感謝いたします。

しかし、わたしたちは、聞いても真剣に耳を傾けず、自分の思いに従って、自分のために生き、あなたが望んでおられることを、中々行なうことが出来ません。

どうか、あなたの御言葉を真剣に聞く耳を与えて下さい。聖霊によって、わたしたちの心を、あなたに向けさせて下さい。

そして、イエスさまによって世界のすべての人に告げられた、神さまの愛と、罪の赦しと、復活の希望を、わたしたちも心から信じ、心から依り頼む者とならせて下さい。

そして、あなたの恵みであって、わたしたちが共に生きていくことが出来ますように。

日々の中には、多くの困難や、苦しみがありますが、わたしたちが主の恵みであって、共に喜びも苦しみも分かち合いつつ、終わりの日の食卓に招かれていることを確信して、希望をもって、神さまに喜ばれる歩みをしていくことができますように。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン